

日の光を浴びて

(二) 水野仙子

タツ！ タツ！ タツ！ あゝ
あの音を形容するのはむづかしい、何といふ文字の貧しい事であらう、あれあんなに優しい微妙な音をたてゝゐるのに……。それは如何にも、あの綺麗な雪が溶けて、露の玉になつて樋の中へ轉び込むのにふさはしい音である……。轉び込んだ露はとろ／＼と響に誘はれて流れ、流れる水はとろ／＼と響を導いて行く。

何といふ静かさだらう！ 絶え間もなく底から露が散る。水晶が碎けて落ちるやうに、否、光そのものが散つ来るやうに……。

日は照れど、日は照れど

日の照る間は短いに

いつまでわたしが待つたなら

凝乎と、冬の日の中に横へられた私の體の中で、柔かな暖かさに包まれながら、何といふものの寂しい聲をたてゝ私のこゝろの唄ふ事だらう！ 一寸でも身動きをしたらその聲はすぐに消えよう、瞬きをしてさへもその聲は絶える。

馬の背中に鞍おいて

浅間の煙仰ぎつゝ

麓をめぐり來きますらむ……

古い名を持つ草津に隠れて、冬籠る身にも、遙々と高原の雪を分けて、うらゝかな日は照つてゐる。

「日が照つてゐる……。」

さうしみ／＼思つた時に、涙らしいものが暖かく私の瞳をうるほしてゐた。

○

短い命ではあつた。それは冬の日の定められた運命である。内端な女心の泣くにも泣かれず凍つてしまつた檐の雪は、日光を宿したまゝに小さな氷柱となつて、暖かな言葉さへかけられたら今にもこぼれ落ちさうに、笥の中を凝視めてゐる。

夕暮と共に寒さは急いで歸つて來た。雨戸をさす間もなく、今まで遠くの林の中に聞えてゐた風の音は、巨人の手の一煽りのやうに吾にもない疾さで驅て來て、その勢ひの中に山の雪を一掃き捲き込んでしまつた。その音づれにすっかり目を覺した地上の雪は、煽られ／＼て來る風の中にさら／＼と舞ひ上り、くる／＼と卷かれては

さあつと人の家の雨戸や屋根を打
つ事に身を委まかしてゐる。その風雪
の一握りのつぶては、時々毛のや
うな欄らんま間の隙や戸障子の仲を盗み
入つて、目に見えぬ冷たいものを
ハラ／＼と私の寢顔にふりかけて
ゆく。寢息もやがて夜着の襟に白
く花咲くであらう、これが草津の
常の夜なのである。けれども馴れ
ては何物も懐しい、吹雪よ、遠慮
なく私の顔を撫でゝゆけ！

【入力者注】

底本は総ルビですが、ふりがな
は一部のみ残しました。

底本に行を合せるため、半角ス
ペースを挿入した箇所があります。

底本…讀賣新聞

大正八(1919)年二月七日朝刊

テキスト入力…小林 徹

公開…令和七年八月十九日

リンク…[水野仙子作品年譜](#)